

2. 5

——行っちゃいました……それにしても、楽しい人でした。あんな風に出来たら良いなあ、とは思っただけ、なかなかそうは行きません。でもいつかは……思っただけで、行動に移さなかった今までの僕も悪いんですけどね。

それよりも、文芸部も僕たちが入っても七人ですか——ノゾミくんはふりーだむに生きるそうですから絶望的ですし、ここは地道に、広報活動を行って部員を集めた方が良いでしょう。残り三人、今日は来ていなくても、明日来るかもしれないし、ギリギリになって悩んだ末に提出する人も居るかもしれません。その辺りも考慮して、二週間の内に部員を集めないで、少女漫画研究部に続いて、文芸部までなくなっちゃいます！ それだけは嫌です。

……話を変えまして、中心生徒会長さんは本当に厳しい人ですね。規則の塊みたいな人だっぴ一目見た瞬間に理解出来ましたし、それに、人に慕われているのかどうかはともかくとしても、自分からそんな人に嫌われるような仕事に就く事も、凄じ事だと思います。

散らかってしまったソーイングセットを片づけながら考える。ネムさんとノゾミくんも一緒に落ちてしまった糸とかを取ってくれる——ありがたいございます。おかげで普通よりも早く片付けを終わらせる事が出来ました。

「どんと、うおおおい」
「はい。たいした事ありません。……それより、お裁縫、上手、なんです」

え、あ、はい。趣味の一つみたいなものです。ぬいぐるみとか、ほつれちゃったボタンとか、直すのは得意ですから。それに好きなんですよ、そうやって、破れてしまったものとか、壊れてしまったものを直したりするの……可哀そうですし、何とか

して元の姿に戻してあげたいって、思っちゃうんです。

少し、変な趣味ですかね？ 直す事を趣味にしてるなんて——

「いえ、そんな事はありません。……あ、出来れば私のぬいぐるみも今度直してくれませんか？」

「あ、はい」

——良かった、本当に、このまま何事もなく、終わってくれれば良いんですけど……

そこで……ガタンっ、と音がして、空気が凍りついた。



説明を一通り受けたレイは、あまり掴みはよろしくないと感じていた。……自分はやはり、バスケットボールは趣味の領域を出ていないようだ。真剣にするには何か——決定的な何かに欠けるのだ。ここまでくると、別の部活に入った方がよさそうだ。半端な心意気で部活に入ったところで長くは続かない。

説明を終えて、その場所から離れようとしたところで、やはり、アリスの事が脳裏に浮かんだ。一体どうしたであろうか？ バンド部に入る事が出来たのだろうか？

ため息を吐いて、やはり、気になっている自分は、彼を見捨てる事が出来ないのではないのだろうか、と思いを掻く。そもそも、中学の時も、その前の小学の時も、彼と共だったからこそ、楽しい生活を送れたのだから。無しの生活が、考えられなくなってしまったのだろうか。

中学の時の部活、サッカー部でも、アリスと一緒にだった。ブランシュは居なかったが、アリスとは一緒だった。そう考えると、今乗り気でない理由は彼にあるのではないのだろうか……——尚、今現在、心中でサッカーをやるうと云う気持ちは一つもない

色々と考えているうちに、いつの間にか十分以上の時間が経過していた事に気づく。体育館の壁に背中を預けて、顎に手を当てながら考えている姿は、女性から視れば優美であろう。無論、彼に視せつけるような趣味は存在していないが……

とにかく、悩んでいても仕方がない。今日一日は部活については保留にして、彼の元へと向かう。パンフレットをバッグより取り出して覗くと、芸能学部棟の端に文系の部活棟があり、その四階に、バンド部の部室が存在しているとの事だ。

——が、レイ自身、先ほど先輩に話を聞いた時は真剣に驚きを返した。

まさか、バンド部が今年で廃部になるとは……知っているであろうか？ いや、バンド部に突入した時点で、部員に知らせられているであろう。部員不足と言ったところで、一人も居ないとは考えにくい。

一体どれほどの絶望を味わっただろうか。掛ける言葉を探す為に再び歩きながらも頭を回して色々と考える。

「おい、前視て歩け」
下にやっていた顔をあげると、例の先輩がそこに腕を組んで立っていた。

「アレ、部活は……」
「緊急徴収だよ。オレも部活だけやっているワケじゃないしな。色々とあるんだよ、中心生徒会長の呼び出しでさ」

「中心生徒会長——ああ、あの一番偉い生徒会長とか何とかの」

手で相槌を打つと、理解する。この学校に三人の生徒会長が居り、一番権力を握っている生徒会長が中心生徒会長だとは、既に理解している。……しかし、そんな人物と呼ばれているとなると、この男、何かをやらしたのか。

「ちげえよ。仕事だよ、仕事。部活も重要だったの

に、イザベラのヤツ……」

「え、仕事？」

「——出来そこないの部活をたたき割る仕事だぞうだ。イザベラいわくな。まさか『ナイン』を全て徴収するって事は……あの部活か……」



一つの物音はすぐに違う事になる。……色々と、僕も混乱していると言いますか、どうしてこうなったのか本当にわかりません。はい。だからこそ、今冷静になって現在の状況を確認する事が出来るんです。

状況は……まず、僕らの方から話していくと——
僕は部屋の中心に立っている状況。
ネムさんは、僕の背中の一つ後ろに立っている状況。

ノゾミくんが、部室の出入り口に手を掛けたまま、止まっている状況。

ブランシユくんは、部屋の中央近く、つまり僕の丁度目の前で本を開いたまま、座っている。

——以上が、現在の僕たちの状況。突然の出来事に、言った通り、混乱していて、唾も飲めない状況で、息をするのにも苦労している。

視線だけを動かすと、文芸部の部員さんたちが困むように立っていて……四年生の部長さんが一番目の前の机の上に腰を掛けていて、出入り口のノゾミくんのところには二人の金属アクセサリーを着けた不良さん——つぽい人。さらに部屋の一番左側に二人の同じカンジの人。さらに右側に二人の同じカンジの——。最後に、ブランシユくんの隣側にさらに二人の、今度は多分、僕たちと同じ状況の新入部員が座っている。

状況は多分——最悪。

——子供の頃からの僕の将来の夢は正義の味方。

テレビでも、そして……子供の頃に助けてくれた一人の男の人。だからこそ、僕は正義の味方になろうと思つた。

でも案外、そう云う場面に直面すると、思考に反して僕の頭の中は冷静になり過ぎて、逆に動けない。どうしようもなく、待機しているだけ——

現状を簡単に説明すると、目の前に座っている部長さんの態度が、一変したと云うだけの話。

「……つたく、面倒な事になったな。私たちのたまり場として、結構重宝しているんだけどな、この文芸部……」

吐き捨てるように述べられたその言葉は、初めて彼女を視て、好感を持った人にとっては考えられない一言かもしれないけど……事実。

「どうして、こんな事をするんですか？」
 恐る恐る、訊いてみる。

「——おかしな事を訊くわね。考えてもみなさいよ、部活を作つて、活動をしていると思わせれば、それだけで部費が入ってくるし、生徒会からの維持費も入ってくる。莫大な金よ。それを、ただ本当に部活だけに使うと思つているの？ ひやは」

ひやは、と特徴のある笑い方は、少し、ムカつてきたかな……

「アンタが入ろうと思つていた少女漫画研究部も、実は私たちとグルだったのよ」

「……え……？」

「つーまーり、少女漫画研究部は、私たちと同じ事をしていてグルだった、ってワケ。ほら、アンタの後ろに居るヘッドフォンのヤツを困んでいる二人は、その少女漫画研究部の元部員よ」

ごくり、と音を鳴らして唾を飲むと、後ろを振り向く。目つきの悪い不良さんが、嗤いながら、こっちを視ている。……だから、廃部にされたんですね。

「そうよ。——案外あの中心生徒会長は甘いみたいで、アイツらを警察に突き出す事はしなかった。だから、人が少なくなった文芸部に迎え入れたワケ。

流星に、仲間を見捨てるわけにはいかないからね」
 「恩にきるぜ」

ひやは、ともう一度笑う。

「文芸部もそう云う面を中心生徒会長に視せないようにやってきたのよ。四年間ね。私が部長になる前は、随分クソ真面目にやっていたみたいけど……今じゃ、そんな事を考えるのは新入りの一年生だけ。

——言つとくけど、退部は認められないよ。退部するつて言つたら、どうなるかわかつているわよね？」

みしり、みしり、みしり。

……指が鳴る、音………凄まじい音。僕なんかやられたら、泣いて、倒れちゃうな……

床に投げつけられた入部届け。これに書名すれば、噴れて、この文芸部に入部する事になるんだけど……いや、僕はこんな部活は嫌だな。でも断る余地が存在していない。何せ、ここで断れば、ノゾミくんも、ブランシユくんも、ネムさんも、酷い目に会う事は間違いない。

さつき振り向いた時、ノゾミくんは色々とかかを考えていたようにけど、正直、そんな暇はないんだ。一刻も早く、状況を打破しないと……

一歩後ろに下がつて、ネムさんと密着する距離まで、間を縮める。出入り口には二人。僕らを困んでいる、部室内の人は……部長さんを含めると七人。逃げるにはハードルが高過ぎると判断。僕に今現在、出来る事は、ない。

だけど時間を稼ぐ事は出来るかもしれない。時間がないなら、作れば良い。さつきみたいに、もう一度、会話にこぎつける事が出来れば、ノゾミくんもアイディアも、実行する事が出来るかもしれないんだ！ だから、あの時、ノゾミくんは僕を視た、と考えているけど……実際はどうなんでしょうかね？

冷静になった頭でも、人の心までは察せない。

とにかく時間を稼ぐ、何か、会話のタネを作る。

「……部長さん、今なら間に合いますよ。素直に、中心生徒会長さんに自首した方が良いんじゃないですか?」

問い掛ける、と、部長さんはため息を一つ吐いた後、苦笑をする。

「アンタ、私を説得しようてのか? ……アホらしい。よく他人の事を心配してられるね。今の状況を、考えた方が良いわよ」

こつこつ、と靴が地面を叩く音がして、目の前に部長さんの姿——「ごふっっ!」

「リン——っ!」

「に、二ノ宮くん!」

「……………ッ!」

……………あ、がっ!

……………何が、あったん、でしょうか? 一瞬視界が暗転して、もう一度衝撃が奔って、僕の意識が混乱して、理解する。

お腹を、殴られて、倒れたところで今度は蹴られた。

心配してくれたのか、ノゾミさんと、ネムさん、そしてブランシユくんが姿勢を崩した。

メチャクチャ痛い、です。上を視ると、そこには、もう一発蹴りあげようとする部長さんがいて……………

…っ!

「そこまでしてもらいましょうか? 文芸部の諸君」

———救世主が現れた。

「げ、生徒会長……………ッ! ——ッ!」

『魅惑の美男』ッ!」

……………メガネをあげながら立っている中心生徒会長さんは、さっきと同じ人を連れて、現れた。『魅惑の美男』と呼ばれた人は、片目をつむってウインク。

「いやあ、上手い具合に時間を稼いでくれてありがとう。女顔の天使ちゃん」

「キミが時間を稼いでくれたおかげで、随分と楽になりましたよ」

「……………あ」

思考は出来ても、僕の口は動かない。口の中が切れていて、痛い。

「しかし……………オディール。キサマがよしみでこいつらを逃せと言ったから逃したが……………このザマだぞ」

「……………ああ。なら、もう二度目はない」

「ふん。キサマと言ひ、キリクサと言ひ、物好きだな」

「———ごちゃごちゃ言ってんじゃねーっ!」

がすっ、と、ばん、両方が混ざった音。

「……っ」

「いくら『ナイン』といえども、一人だけだろーがっ!」

「……………オディール、良く我慢したな。

これより、執行を開始する。理由……………『暴力』。

先に仕掛けたのはそっちだ、覚悟しろ、下僕ども」

……………部屋のクローゼットの中と窓ガラスを破って、二人の男の人が入ってきた。

「待たせやがって」

「……………正直徴集は勘弁してもらいたい……………面倒」

『『ナイン』の……………『堅物の守護者』と———『美の化身』、だと……………』

あ、あのバットを持った怖い先輩の人です。

「るっしやあ! ごら! やるぞテメーらああああ

ああああ」

「う、うわあああああああああああああああああああああああああああっ! バットなんて、ひき

よ———あぶごおおおおおおおおおおおおあああああああああああああああああああッ!」

あああああああああああああああああああああああああああああああああああああッ!」

「人質の方がよっぽど卑怯だっつーの」



状況は一転した。最初こそ、人質として居た二ノ宮リン、ネム・リー、那古ノゾミ、雪白ブランシユの存在は居ても変わりがなくなつたと言えよう。何せ、相手は……………この学院の治安を乱す相手には容赦のない、堅物、織部イザベラが居るのである。それを守るように居る、三人の男——

「…………『魅惑の美男』…………黒羽オデイル——

『堅物の守護者』…………赤城キリクサ——

『美の化身』…………赤月セレン——」

驚きと恐怖、二つの感情が混ざり合った混沌。中心に存在しているのは、ただ逃げるしかないと言う感情と、もう一つ、動けないイザベラを考えれば、三人をここに居る全員でねじ伏せる事が出来るのではないのだろうかと言ふ念の二つだ。——何せ、この三人だけでも倒す事が出来れば、我々は英雄になる。

天秤にリスクを乗せて、成果を乗せる。つり合うか、つり合わないか……………結論にたどり着くのに一分も要らなかつた。三十秒で、全ての青年たちは、自らの欲望と名声の為だけに、一気に殴りかかつた。

「命知らずだ事」

「つか、なあーんでセレン、オマエが居るんだよ。

オマエ非戦闘員だろうが」

「いやあ、ね、俺だつて一応徴集受けているワケだし？ 呼ばれていかない訳には、いかないでしょう？」

「…………う、まあ、そうだな…………」

バットを抱えたまま香気に会話をする二人をそのままにして、一気に後ろから拳が飛んでくるのを、眺める事もなく体をのけ反る事で避け、軽くバットで一発。鈍い音が響いて、青年の体制が崩れて、セレンの足払いで最後だつた。襲ってきた三人の体制

は崩れて、その場に倒れる。

ため息を吐く。全く無謀な事が好きだな、と漏らした後に、バットの先端で倒れた相手に対して留めをさす。

何もしていないオデイルは、女性の声真似をしながら、きゃー、やら、おわー、など言いながらイザベラに抱きついている。

「…………おい、オデイル、オマエも手伝えよ」

「えー、オデイ子、怖い事できなーい」

「なあにがオデイ子だよ。オマエ男だろうが」

また様々なやり取りが行われる事になるのだが、後ろでは、呆気にとられているリン、ネムが居た。

隙が出来たノゾミは、頭を動かして困んでいる男に一撃を加えると、蹴りを二、三発、ヘッドフォンから流れてくるラップ音楽に合わせて放つ。

ひゅー、と声と口笛が混じつた音をオデイルが放つ。真剣に、些事のもりで放つた口笛なのである。

形勢逆転、部長である少女と、周りに居た男たちが隙を視て部屋を抜け出そうとする。

「おつとー…………無理な事をするんじゃないよおー」

——だが、部屋の目の前には、行く手を阻むように白衣を着た、一人の美青年が立っていたのである。手の上に、何やら珍妙な代物を持って——

すぐに、部長とその面々の男たちの意識が飛ぶ事になる。何せ、代物からは凄まじいほどの音と光が飛び出して、壁に特大の穴を空けてしまったのである。その爆発の衝撃で、部長と男たちは壁に激突し……………気を失ってしまったのだろう。

「エニシダッ！」

セレンがすぐに飛び出して、その発明品を落とす。

「のおおおおお！ ウチの最新式の発明品がああああああッ！ 『Code: X - P ver.2.3』があああああああああッ！」

エニシダと呼ばれた、人間が現れたと思うと凄まじい光が放たれ、穴が空き……………

